2017年8月29日　東京大学新聞　２面
※東京大学新聞社の許可を得て掲載しております。無断で複製・転載することを禁じます。

五神総長（右）の話に学生からも積極的な発言が見られた＝7月31日、駒場Iキャンパスで（撮影・関根隆朗）

自著刊行記念
「総長と語る会」

東大の学び 社会で活用

総長 能動的な学び推進

五神真総長は7月31日、自著『変革を駆動する大学』（東京大学出版会）の刊行を記念し、東大の学生14人と大学の改革や将来像についての意見交換会を開催し、学生たちの声に耳を傾けた。出席した学生は1、2年生が中心で、2人の留学生も参加。会はテーマについて五神総長が考えを語り、学生が意見や質問を投じる形で進行した。テーマは東大の教育や入試制度、グローバル化が進む世の中にあって学生たちに期待することなど。学生からも本音ベースの率直な質問が五神総長に投げ掛けられた。

●大学教育について

五神総長　産業構造が変化する中で、東大の卒業生が産業界でその力を十分に発揮できていないと感じることがある。彼らの能力を活かせないままに終わらせてしまうのは問題。世界の変化に柔軟に対応し、包容力を持った社会にしていかねばならない。

私は総長として、世界の中で東大がどのような役割を果たせるか考えている。学生の皆さんが東大で学び会得した多様な知の力を社会の中で存分に活用できるよう、社会の側の受け手として産業界とも協力しながら環境作りを進めたい。個性ある能力を持った人材が変化の大きな現代の社会で輝く手助けをしたい。受験勉強とは異なり、答えのない問いに取り組む大学での学びを実感してもらうためにも、一つの試みとして初年次ゼミナールを2015年から導入した。

学生　初ゼミは確かに教員との距離は近いが、議論の作法も分からないので深まらない問題もあった。それよりも、1年次は必修科目が多く興味のある授業を満足に履修できない問題の方が深刻だと思う。

●東大の多様性について

学生　留学生と生活で関わる機会が少ない。交流する機会が増えると、貴重な刺激を受けることができる。

総長　東大入試は日本の教育システムを前提として高い水準の学力を持った学生たちを受け入れるメリットはある。一方、多様な価値感を持った学生が切磋琢磨する環境を作ることも重要。留学生を増やすことは多様性を促すことになるので、その仕組みを作ろうと考えている。

●高校・大学の接続について

学生　高校までは問題を与えられて正解を探す形式だが、大学では問題を自分で探す必要がある。大学進学が社会のシステムの一部となっており、学ぶ姿勢が整わないまま漫然と進学して能動的な学習環境に戸惑う人が多いと思う。

総長　例えば数学ではマイナスにマイナスを掛けるとプラスになるが、それをただ機能として受け入れられる人と、背後の意味を突き詰めることが気になってこだわる人がいる。後者のように能動的な学問への姿勢をエンカレッジできる仕組みを検討したい。

●「スポーツ先端科学研究拠点」について

総長　25年には団塊の世代が後期高齢者となる中、高齢者が積極的に社会参加できる仕組みの整備は急務だ。東大は「トップサイエンティスト」と「トップアスリート」の組み合わせで健康長寿社会の実現に向けた研究を加速させることを考えている。20年の東京オリンピック・パラリンピックはそのきっかけになり得る。

学生の皆さんが受けるスポ身（正式名は身体運動・健康科学実習）の教員はスポーツ科学業界でも極めて高く評価されている先生方。身近にこのような優れた教員がいるのは東大ならではの利点。東大生には恵まれた環境を存分に生かし、社会のためにどう貢献できるか考えてほしい。

●最後に学生から一言

東大の環境をより生かすためにも、今回のように大学運営の話を総長から聞ける機会を増やしてほしい▼後期課程でも駒場のようなリベラルアーツの授業があると良い。

◇

主催：東京大学出版会
後援：東京大学新聞社